

<メサイア>研究ノートII：  
1741年から1759年の演奏とVersionをめぐって

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村原(田中), 京子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10232/1123">http://hdl.handle.net/10232/1123</a>

＜メサイア＞ 研究ノート II  
— 1741年から1759年の演奏と Version をめぐって —

村原（田中）京子  
(2004年10月8日 受理)

A Study of <MESSIAH> II :  
Performances and Versions from 1741 to 1759

TANAKA-MURAHARA Kyoko

要 約

1741年に作曲されてから、ダブリン初演、ロンドン初演・再演とヘンデルの没年迄、変更を加えながら上演され続けた＜メサイア＞。各上演毎に如何なる変化、編曲、加筆、移調があったか、当時の背景（前稿：＜メサイア＞研究ノートI）の上に、それらを歌った歌手を、ヘンデルの指揮スコア（ファクシミリ版）に見られる自筆の歌手名、当時の新聞記事、捨子養育院教会古文書等々から調べあげ、歌手の技量に対するヘンデルの思いを考慮しながら、演奏バージョンの変遷を辿った。＜メサイア＞の中で特に我々に馴染み深い、或いは名曲とされるソロ楽曲の多くが、ヘンデル生存中の18年間の演奏に於いて熟考され、幾種ものバージョンが生まれたこと、今日の＜メサイア＞演奏がそれらの中から、編者（モーツァルト版等々）によってピックアップされているものであることを確認し、歴史的原点に戻った＜メサイア＞演奏のための指針を求めた研究である。

キーワード：ヘンデル、オラトリオ、メサイア、バージョン研究、ヘンデル歌手

§. 序

昨年度の研究紀要において、＜メサイア＞の成立、及び初演から再演の背景を、当時の資料を基に研究詳述した。今回は次なる課題として、ヘンデル生存中一度として全く同じ形で演奏されたことが無いという当時の版（楽譜）を調べあげ、今日の＜メサイア＞の源流を求め、種々比較を試みたいと考える。上演のたびに楽曲の一部が変わるとするのは、18世紀当時の音楽習慣からするとさほど驚くべき事ではなく、作曲者の意図した定本が数種あるかもしれないという事を、常に念頭に置かねばならない。常に新しい作品が求められた時代であり、一つの楽曲が何回も、何年にも渡っ

て演奏され続けたという事の方が珍しい時代だった。とは言え音楽史上、＜メサイア＞くらい作曲家自身が上演ごとに再考した作品、変更した作品も少ないのではないだろうか。1741年9月14日、自信を持って“完成”と書き上げた＜メサイア＞、その初演から彼自身の没年まで、幾たびとなく変えられたのは何故、又それを証明する証拠は、と自問しながら、Ouseley copy オーズレイ写本と呼ばれるヘンデルの指揮スコア（ファクシミリ版）、筆者秘蔵の18世紀（1768）出版初版楽譜、ベーレンライター・新ヘンデル全集、クリュザンダー・ヘンデル全集、そして種々の実用楽譜を繰ること数ヶ月。そこから見えてきたもの、またその過程において派生した興味深い事実を纏める事などを、今回の＜メサイア＞研究ノートⅡとする。

## § . 作曲当初（1741）のオリジナル＜メサイア＞

1741年作品完成直後の秋、ヘンデルお抱えの筆写家、父スミス（John. Christopher Smith 1683～1763）<sup>註1</sup>が、筆写した手稿譜は今日の＜メサイア＞、というよりもヘンデルがその後の18年の間に変更していったものと比べるとかなりの部分で異なっている。これが最初の＜メサイア＞であるとしても、現代の我々には耳慣れない楽曲を多く含んでおり、一般には使用されていないという事を認めた上で、全体を見通していくとしよう。

### 第Ⅰ部：

“But who may abide the day of His coming 彼が来られる日に誰が身を支えられるだろう”ニ短調、3／8拍子、バスのために書かれたことは、現在用いられるものと同じであるが、前奏5小節目から八分休符を伴った音型となり、通常とは異なってくる<sup>2</sup>。全体は136小節、その後の158小節よりかなり短い。後の版におけるABAのBの部分、Prestissimo、4／4拍子、“For He is like a refiner's fire この方は精練する者の火の様だ”の言葉の箇所ではテンポ、拍子の変化は無く、A部分の繰り返しで、単調かつ平凡だと言わざるを得ない。

“Rejoice greatly, O daughter of Zion おおいに喜び、シオンの娘よ” 12／8拍子



A. (1941年版)      B. (その後の変更) おそらく1949年の変更

上掲のA. B例で明らかな様に、4／4拍子、16分音符で転がす音型に慣れている我々は、3連

<sup>1</sup> ヘンデルの忠実な助手として作品の写譜、清書を行った人物。死後は同名の息子が引き継いだ

<sup>2</sup> Watkins Shaw はThe story of HANDEL' s MESSIAHの中で、16小節目までは全く変わらないとしているが誤りである。

8分音符のかたちには目を見張らざるを得ない。12／8拍子と4／4拍子のリズム・パターンの違いだけではなく、12／8拍子版は非常に長く、113小節+91小節のダ・カーポが付けられている。4／4拍子版は108小節。更に興味深いことは、ヘンデルが、12／8拍子版において、通奏低音パートを4分音符で、即ち4／4拍子型で書いているということ。書き間違いでは？否、当時の通奏低音パートの書き方にはこうした例も少なくないのであるから、更に後に4／4拍子に替えられるのであるから。<sup>3</sup>

“He shall feed his flock like a shepherd 主は羊飼いのようにその群を養い”は、アルトとソプラノの二重唱として親しまれている美しいシチリアーナ旋律であるが、当初はへ長調のアルト部分と変口長調のソプラノ部分に分かれていなかった。今日アルトで歌う最初の部分が、同じ旋律で4度高く書かれている。当然の事ながら、それに先んじるレチタティーヴォ “Then shall the eyes of the blind その時めしいの目は開き”も4度高い。1741年のオリジナル版でヘンデルがソプラノの為の2つの長いアリア “Rejoice greatly,” と “He shall feed his flock” を続けて、共に12／8拍子、変口長調で、一方を Allegro で他方を Larghetto で書いたということに注目したい。

#### 第II部：

“Thou art gone up on high 主は高きに上り給い”は、オリジナルもバス・アリアではあったが、Allegro 及び Allegro Larghetto (?) の指示のもと、当初オリジナル版では124小節、その後の上演の際に現在の116小節分に縮められたものと思われる。この曲は、ヘンデルの指揮スコア（ファクシミル）ではソプラノ譜号で書かれており、最後の復縦線のところに敢えて116と手書きされている。ソプラノ版（出版初版楽譜）もあり、歌い手によって、自在に変化させたものと思われる。

“Their sound is gone out into all lands その声はあまねく全地に響き渡り”は、良く知られた四声部のコーラスではなく、前曲 “How beautiful are the feet of them 良き知らせを伝える者の足は、何と美しいことよ” で始まるソプラノ・アリアの中間部としてソプラノ・ソロで “Their sound ~” の言葉が置かれ、dal segno となって “How beautiful ~” が繰り返される。

#### 第III部：

第III部では大きな変化は認められないが、

“The trumpet shall sound トランペットは鳴り” が現在一般的には dal segno であるのに対し、da capo の形によっている。

“O death ,where is thy sting 死よ、お前の勝利は何処にあるのか” が、アルトとテノールの二重唱（41小節）ではなく、ソプラノ・ソロで極めて短く（5小節目変化、その後の17小節なし）、全体で24小節のみである。

<sup>3</sup> A. コレリやバッハもしばしばこうした書法を使っている



## 1742～59年の＜メサイア＞を歌った歌手

1742年（ダブリン初演 4月13日 フィッシャンプル街 ニュー・ミュージック・ホール）

ソプラノ： Sra. Avolio, Mrs. Maclaine

アルト： Mrs. Cibber, Mr. William Lamb, Mr. Joseph Ward

テノール： James Bailey, John Church\*

バス： John Hill, John Mason

- \* W. Shaw は Church 氏を挙げていないが、ダブリン・ジャーナルから推測するに、歌ったと思われる。なお、17日付け当ジャーナルの批評にあるデュポルク氏は、掲載名としては何処にも見当たらない。

1743年（ロンドン初演 3月23日 コヴェント・ガーデン劇場）

ソプラノ： Sra. Avolio, ( Miss Edwards\*), Mrs. Clive, a boy\*

アルト： Mrs. Cibber,

テノール： Thomas Lowe

バス： Thomas Reinhold, William Savage

- \* W. Shaw は Edwards 嬢を並列記載しているが、Sra. Avolio, 或いは Miss Edwards とする見方もある。43, 49, 50年の劇場演奏では少年も加えたいらしい

1745年（ロンドン 4月9, 11日の2回 国王ヘイマーケット劇場,）

ソプラノ： Mrs. Elisabeth Duparc (La Francesina の愛称で呼ばれるフランスの踊り子)

アルト： Mrs. Cibber, Miss. Robinson

テノール： John Beard

バス： Thomas Reinhold

(以後4年間、＜メサイア＞は全く演奏されなかった)

1749年（ロンドン 3月23日 コヴェント・ガーデン劇場 ロンドンで初めて＜メサイア＞の  
タイトル予告、これ以後52年迄毎年コヴェント・ガーデン劇場で演奏された）

ソプラノ： Sra. Frasi, a boy\*

アルト： Sra. Galli

テノール： Thomas Lowe

バス： Thomas Reinhold

1750年（ロンドン 4月12日 コヴェント・ガーデン劇場）

(ロンドン 5月1日 捨子養育院、＜捨子養育院メサイア＞は、これ以後ヘンデルの  
没年まで続けられた)

ソプラノ： Sra. Frasi, a boy\*

アルト： Sra. Galli, Sr. Guadagni

テノール： Thomas Lowe

バ ス： Thomas Reinhold

1752年（ロンドン コヴェント・ガーデン劇場）

ソプラノ： Sra. Frasi,

アルト： Sra.Galli

テノール： John Beard

バ ス： Robert Wass

1753年（ロンドン 4月19日 コヴェント・ガーデン劇場, 5月1日：捨子養育院）

ソプラノ： Sra. Frasi,

アルト： Sra.Guadagni

テノール： John Beard

バ ス： Robert Wass

1754年（ロンドン 5月29日 捨子養育院）\*

ソプラノ： Sra. Frasi, Sra.Passerini

アルト： Sra.Galli

テノール： John Beard

バ ス： Robert Wass

\* 1754, 58, 59年の捨子養育院メサイアに関しては、詳細な収支記録があり、全演奏者名が出演料と共にリストアップされている。

1758年（ロンドン 4月27日 捨子養育院）

ソプラノ： Sra. Frasi,

アルト： Miss Frederick. Miss Young (Mrs. Scott)

テノール： John Beard

バ ス： Samuel Champness

1759年（ロンドン 5月3日 捨子養育院）

ソプラノ： Sra. Frasi,

アルト： Sra. Ricciarelli, Mrs. Scott

テノール： John Beard

バ ス： Samuel Champness

以上およそ17年間に＜メサイア＞演奏に関わったソリスト名を確認した結果、フラージ夫人、ガッリ夫人、ビアード氏、ラインホルド氏等かなりの歌手が＜メサイア＞を歌い続けてきた事が明らかになる。

### ダブリン初演時（1742）のVersion

ダブリン初演時の新聞批評等に関しては、既に昨年の＜メサイア＞研究ノートIで紹介済みであるが、楽曲の変更については、その折に出された歌詞集（リブレット集）から推測出来る事が多い。第I部、今日のバス・アリア“*But who may abide the day of His coming 彼が来られる日に誰が身を支えられるだろう*”，第II部の 同じくバス・アリア“*Thou art gone up on high 主は高きに上り給い*”，テノール・アリア“*Thou shalt break them with a rod of iron 主は鉄の杖で彼等をうちて*”，この3曲のアリアは初演時には、バス声部ではあるがレチタティーヴォで語られたらしいことを、残された歌詞集が証明している。3曲のうち、“*But who may abide*”と“*Thou shalt break*”は新ヘンデル全集では Appendix（付録）として掲載されているが、2番目の“*Thou art gone up*”は、先の歌詞集の記録だけで、実際の譜例は存在しない、というか見つかっていない。

“*Thou shalt break them with a rod of iron*” のレチタティーヴォ例

The image shows two systems of musical notation for a Tenor part. The first system is labeled "TENOR" and contains the lyrics "Thou shalt break them with a rod of i-ron;". The second system contains the lyrics "thou shalt dash them to pi-c-es like a pot-ter's ves-sel." Both systems show a vocal line on a treble clef staff and a basso continuo line on a bass clef staff. The music is in a common time signature and features a mix of eighth and sixteenth notes.

第II部の“*The Lord gave the word 主は御言葉を賜り*”の後に続く、1741年のオリジナルではABA型の1曲であった、かの“*How beautiful are the feet of them . . . . , Their sound gone out 良き知らせを伝える者の足は、何と美しいことよ . . . . その声は全地に響き渡り*”（新約聖書ローマの信徒への手紙 10-15, 18）が、聖書の中の他の部分（旧約聖書イザヤ書）に変えられ二重唱で始まり、コーラスへと繋がる。リブレット集から判断する限り、意図的変化である。更に“*Their sound gone out*”の言葉では通奏低音のみのレチタティーヴォ<sup>8</sup>に代えられた。

How beautiful are the feet of them~が How beautiful are the feet of Him that bringeth good tidings, tidings of salvation; that unto Zion. Thy God reigneth! Break forth into joy.

<sup>8</sup> ベーレンライター新ヘンデル全集：補遺 P.306参照



良きこと、救済をもたらす人の足は何と素晴らしいのでしょうか；シオンに向かって汝主が世を治めよ！喜びに前進せよ！この歌詞の変更は何を意味するものであろうか、そして、3/4拍子、ニ短調というのも我々には耳慣れない。その後の演奏でもソプラノであったり、テノールであったり、アルトであったりと、更に二重唱、コーラスと5種類の版が存在する。その歌詞集の中にしばしばCibber（シバ夫人）の綴りが見える。

第I部、最後の山場となる“Then shall the eyes of the blind その時めしいの目は開き”の部分にシバ夫人の名があり、これは次のアリア“He shall feed his flock like a shepherd 主は羊飼いのようにその群を養い”をも彼女に歌わせたという事であろう。それ故、オリジナルがソプラノ用であったものが、ダブリンでシバ夫人に歌わせたことで、4度低いアルトの形に変更され、その後この版がオーソドックスな版になったものと考えられる。この辺は冷静に楽譜を眺めると、前曲の“Rejoice, greatly ~喜ベシオンの娘よ”からずーっとソプラノの変口長調が続くことになり、ヘンデルはそれを意識した事もある、へ長調のアルトと考え直したのかもしれない。

第II部冒頭の“Behold the Lamb of God 見よ。神の子羊を”に見られるシバの名も続くアリア“He was despised 主はさげすまれ”をシバ夫人に歌わせた事を彷彿とさせる。

更に第III部 最終アーメン・コーラスの前のソプラノ・アリア“If God be for us, who can be against us 主が私達の見方であるなら”の箇所もシバ夫人の名前、即ちソプラノ（ト短調）ではなくアルト（ハ短調）に歌わせたということなのである。ソプラノを目論んだアリアの多くをアルトに変えたということ、即ちシバ夫人はダブリン初演の最重要花形歌手だったと確信出来よう。

この歌詞集にはメモ書きされた男性ソリストの名前（テノールのベイリー氏、バスのメーソン氏、ヒル氏）もあり、“Why do the nations ~何故諸々の国民は~”はヒル氏が歌った模様。更にそのメモ書きによると、コントラアルトのワード氏は“Then shall be brought to pass ~ 御言葉は実現し~”を歌い、続く二重唱“O death, where is thy sting ? 死よ、汝の勝利は何処に？”をテノールのベイリー氏と共に歌ったことになる。コントラアルトのラム氏の名はレチタティーヴォ“Behold, a Virgin shall conceive 見よ、乙女が身ごもり”にあるので、次のアリア“O thou that tallest good things 喜びの手紙を伝える者は”をも歌った事になる。彼等男性ソリストに起用された歌手達は、ダブリンの2つの教会合唱隊のメンバーからの抜擢だった。

ダブリン初演のキャストとして、ダブリン・ジャーナルの広告記載及び歌詞集のメモ書きの両方に違うことなく一致した名前が登場し、正確な情報として評価出来た。

ここで、我々が気がつかねばならないことーヘンデルの時代は、現代と違ってソプラノ、アルト、テノール、バス各パート1名のソリストと大編成合唱隊から成るのではなく、各パート2~3人がソリストとして割り当てられ、彼等も共に合唱パートに参加していたという事実である。合唱陣も極めて小編成であったことが窺える（詳細文献資料については後述）。

上に述べた1742年ダブリン初演の折の歌詞集は、現在大英博物館が所有しているが、シェクスピア研究者のDowden ドーデンという人物がダブリンの古本屋（露店）で発見し、ダブリン王立

礼拝堂オルガニスト J.C Culwick カルビック博士に譲渡，1891年に大英博物館に寄贈された<sup>9</sup>。

## ロンドン上演のVersion

### —1743年と45年のVersion—

ロンドン初演に際し，ヘンデルは緊張のうちに身構え，＜メサイア＞という曲名を隠し，＜新しい宗教的オラトリオ＞の名で劇場披露を果たした。前年のダブリン初演で好評だったソプラノのアヴォーリオ夫人，アルトのシバ夫人を引き続き起用，アルト，テノール，バスのソリストは各一名だったが，ソプラノはアヴォーリオ夫人に加えてエドワーズ嬢，クライブ夫人の3名を遣ったと記録されている。エドワーズ嬢，ピアード氏，ラインホルト氏，はかつてヘンデルのオペラで活躍した歌手であった。ロンドンで＜メサイア＞を演奏するに先立ち，同じシーズン中に聴衆の反応を窺うかの如く初演されたオラトリオ＜サムソン＞（1743年2月18日）でタイトル・ロール，サムソンを歌ったのがピアード氏であり，その他全てのキャストが＜サムソン＞を歌った歌手だった（もっともこれはシーズンを通じて雇い入れていた歌手ということではあるが）。

指揮スコアのヘンデルの筆跡から，“I know that my redeemer liveth 主は永遠に生き給う”をアヴォーリオ夫人が歌ったと思われる。

このロンドン初演版で，ヘンデルはクライブ夫人のために，第I部＜田園シンフォニー＞の後の伴奏付レチタティーヴォ（アリオーツ）“And lo! the angel of the Lord 見よ！天使あらわれ”に代えて“*But lo! the angel of the Lord came upon them*”の歌詞でアリアを新しく加えている<sup>10</sup>。またこの時，“How beautiful are the feet of them”は，二重唱とコーラスの連結で，中間部“*Their sound gone out*”をソプラノ・アリアに作り替えたと思われる。

“Thou art gone up on high 主は高きに上り給い”がバスからソプラノのための116小節に書き換えられたのは，ロンドン初演もしくは45年の再演の折であったとされてきた。しかし華やかなソプラノ技巧的コロラトゥーラを加えた変更を考えると，45年の上演でソプラノを歌ったフランスの踊り子‘フランツェシーナ’（デュパルク夫人）のための編曲とは考え難い。45年は止むなく一人のソプラノしか使っていないことも事実であり，43年のアヴォーリオ夫人，エドワーズ嬢，クライブ夫人等3人（少年を加えると4人）のソプラノの誰かのために作り替えられたと考える方が妥当である。ロンドン初演という意気込みもあり，43年の上演は特にソプラノ・パートに重点をおいた改作が成されたと考えたい。

45年のソプラノには多くを求めず，“*Their sound is gone out into all lands*”もレチタティーヴォに戻している。ソプラノの穴を埋めるためにも，過去にヘンデルの舞台で活躍したピアード氏を加え，ラインホルト氏と共に活気ある舞台を意図したこと等ヘンデルの苦悩が見えてくる。当時の人気踊り子をソプラノ歌手に据えたこと，おそらくウケを狙った策ではあったが，オラトリオ

<sup>9</sup> Wtkins Shaw: The Story of HANDEL' s MESSIAH p.29

<sup>10</sup> クリュザンダー：ヘンデル全集 P.80 (B)

を教会ではなく劇場で上演する事への非難に加えて、「踊り子を宗教的オラトリオで歌わせた」ことで、輦蹙をも買ったことも否めない。

### 1749年以降のVersion

1745年のロンドン再演の後3年間の空白をおいて、49年に<メサイア>のタイトルを使って再演しようとした時、ヘンデルが更にその作品を変更しようとしたことは明らかである。しかしこの年が改訂最後の年でもなく、更に少しずつ変わっていった。1749年以後<メサイア>が演奏されない年は無かったのであるから、まさに<メサイア>がロンドンの市民権を得た最初の演奏だったと言える。49年の上演から最後の年までソプラノはフラージ夫人であり、そのことが多くのソプラノ決定版へと繋がったと考えられる。

第I部“Rejoice greatly, O daughter of Zion ~”は、現在我々の耳慣れた4/4拍子、108小節のダ・カーボ形式に替えられた。先にクライブ夫人のために書き換えた“*And(But) lo! the angel of the Lord*”のARIAを止め、本来の伴奏付レチタティーヴォ（アリオーソ）に戻っている。そして、“*How beautiful are the feet of Him that bringeth good tidings*”とそれに続く“*Their sound is gone out into all lands*”のイザヤ書の二重唱とコーラスの型を止め、本来の版に立ち返り、ソプラノ・ARIAの4小節（前半）をロマ書の言葉に替え、現在知られている12/8拍子g-moll（ト短調）の“*How beautiful are the feet of them preach the gospel of peace*”とし、“*Their sound is gone out ~*”をコーラスの型とした。ここで今日の我々に馴染み深い美しいシチリアーノ・ARIAと力強いコーラスが定着した。おそらくこの変更の折に、コーラス部分で2本のオーボエが加えられたのであろう。

これらの変更は全てソプラノのためのものであった。すなわち1749年から最後の10年間、全ての<メサイア>演奏のソプラノが、フラージ夫人（Giulia Frasi）であったことを再認識せねばならない。チャールス・バーニーの当時の紹介<sup>11</sup>によると、フラージ夫人は若く、見栄えが良く、甘くはっきりした声の持ち主で、柔らかく上品な歌い方をする歌手だった。イタリア人であったが、英語で旨く歌う歌手だったという。そんな彼女に、ヘンデルはかなり満足していたのであろう。

1749年の上演で従来と異なると感じるのは、ここへ来て初めて各パート1名、計4人のソリストにしたこと（今日の定番）である。また49年、50年の2年間ヘンデルはテノールの人気歌手ピアード氏ではなくローウェ氏を使っている。

先にヘンデルが指揮スコアに朱書きの歌手名を記入した時があったと述べたが、朱書き文字はFrasi, Galli, Lowe, Reinholdの4名であり、彼等全員がソリストであった49年（もしくは50年）の演奏の際の記名であったと考える。Beard他数名の名書きは黒書きである。

第II部の伴奏付レチタティーヴォ“*Thy rebuke hath broken ~嘲りに心うち砕かれ*”とそれに続くアリオーソ“*Behold, and see ~目を留め、見よ*”において、ヘンデルはピアード、ローウェ、

<sup>11</sup> Chares Burny: A General History of Music (1789) p.854

フラージの名を記しており、テノールだけでなく、ソプラノに歌わせた時もあった事が窺える。いずれにしてもこの2～3年の間に様々試みたと考えられる。

そして1750年は＜捨子養育院メサイア＞、始まりの記念すべき年であり<sup>12</sup>、新しいメサイア歌手：男性アルトのグウアダーニが加わった年であった。この歌手のためにヘンデルは“*But who may abide the day of His coming*”と“*Thou art gone up on high*”をコントラアルト版（共に二短調）とし、さらに前者には冒頭“*for Guadagni* グウアダーニのために”とペン書きしている。しかもこの“*But who may abide*～”のアルト版において、“*for he is like a refiner's fire* 彼は精練する者の火のようだ”の言葉の部分は *Prestissimo* と指示、激しいアリオソの形の中間部としている。これはまさにコントラアルトの力強い声に相応しい書法と言えよう。なおこのアルト版は自筆譜としてヘンデルの指揮スコアーに入れられている。

グウアダーニという歌手は、フラージ夫人と共に、イタリアのコミック一座の歌手としてイギリスへ渡り、ヘンデルがその声に魅せられ、雇い入れた歌手である。バーニー<sup>13</sup>によると、1725年ヴィチェンツァ生まれで、そのコントラアルトの声は荒々しく決して洗練されてはいないが、ヘンデルの注意を引き、1750、53年にヘンデルがシバ夫人のために作曲した＜メサイア＞及び＜サムソン＞のアルトを歌った、と当時の記録として書いている。

グウアダーニのために書かれたこのアルト版の2曲は、1754年の捨子養育院メサイアの際には、ソプラノの *Sra. Passerini* パッセリーニ夫人にト短調に移調して歌わせたようであるが、次第にアルト版に定着していったと思われる。

なお1750年の演奏版で使われたと思われる興味深い編曲は、第Ⅱ部の終わりにちかい“*Why do the nations*～何故に国々は騒ぎ立ち～”の後半部分の“*The Kings of the earth rise up* 地上の王は立ち上がり～”が短いレチタティーヴォへの編曲である。これは、ヘンデルの指揮スコアーの巻末に唯一レチタティーヴォだけが付加され残されている。おそらく1750年の演奏の際に、指揮スコアーの中に入れられたものである。

バスのラインホルド氏は1751年に没しており、52年から54年まで *Robert Wass* ヴァス氏が、その後 *Samuel Champness* チャンプネス氏が引き継いだ。彼等のための編曲は想定出来ない。

## §. ＜捨子養育院メサイア＞会計報告から見えてくるもの

1750年に始まり、没年の59年迄10年間、ヘンデルの指揮（その間後半の2年はヘンデル盲目のため指揮者を他に立てた様だが最晩年は再び自ら指揮した）で続けられた、＜捨子養育院メサイア＞は慈善演奏会としての＜メサイア＞を決定的なものにしていった。当時の収支決算書

<sup>12</sup> 拙稿：鹿児島大学教育学部研究紀要（人文・社会科学編）第55巻（2004）p.77

<sup>13</sup> *Chares Burny: A General History of Music* (1789) P.875

(1754, 58, 59年)が残されていることは、300年以上を経た現代の研究者にとって様々な事情を語ってくれる興味深い重要な資料である。

★1754年5月20日付け捨子養育院理事会議事録の会計報告

	£	s.	d.			
チケット (1209枚) 収入	666.	15.	0			
演奏家, 警護等への支払い	58.	17.	6			
	<hr/>	<hr/>	<hr/>			
	607.	17.	6			
支出 明細						
ヴァイオリン				ヴィオラ		
Brown	£1.	1.	-	Smith	8.	-
Collet	15.	-		Warner	8.	-
Freek	15.	-		Warner Jr.	8.	-
Claudio	10.	-		Rawlins	8.	-
Scarpettini	10.	-		Ebelins	8.	-
Wood	10.	-		チェロ		
Wood Jr.	10.	-		Gillier	10.	6
Jackson	10.	-		Haron	10.	6
Abbington	10.	-		Hebden	10.	6
Dunn	10.	-		コントラバス		
Stockton	10.	-		Dietrich	15.	-
Nicholson	10.	-		Thompson	15.	-
Neal	8.	-		バスーン		
Davis	8.	-		Baumgarden	10.	-
Rash	8.	-		Jarvis	8.	-
				Goodman	8.	-
				Dyke	8.	-
楽器指示なし				オーボエ		
Adock	10.	6		Eyford	10.	-
Willis	8.	-		Teede	10.	-
Fr.Smith	10.	6		Vincent	10.	-
Trova	10.	6		Simpson	8.	-
Miller	10.	6				
				オーケストラ総計	£19.	8. 6

歌手			サーバント (裏方等)			
Beard	-	-	Le Blanc	1.	1.	-
Frasi	6.	6.	Gundal		10.	6
Galli	4.	14.	Prince		10.	6
Passerini	4.	14.	Lee		10.	6
Wass	1.	11.	Shepherd		10.	6
Boys	3.	3.	楽器運搬	1.	1.	-
Bildon		10.				
Barrows		10.	Mr.Ch.Smith	5.	5.	-
Cheriton		10.	警護官	2.	2.	-
Ladd		10.	オルガン送風4人・チケット販売等8人			
Baildon		10.			12.	-
Vandenon		10.				
Champness		10.				
Courtney		10.				
Wilder		10.				
Dupee		10.				
Walz		10.				
Cox		10.				
Legg		10.				

オーケストラ+歌手+警護+その他 : 総計 £ 58. 17. 6

★1758年4月27日捨子養育院＜メサイア＞会計報告（5月1日集計）

ヴァイオリン

Brown	£1.	1.	-	Grosman	10.	-
Collet		15.	-	Jackson	10.	-
Freeks		15.	-	Nicholson	10.	-
Frowd		15.	-	ヴィオラ		
Claudio		10.	-	Rash	8.	-
Wood		10.	-	Warner	8.	-
Wood Jr.		10.	-	Stockton	8.	-
Denner		10.	-			
Abbingon		10.	-			

## チェロ ホルン &amp; 太鼓

Guiller	10.	6	Adock	10.	6
Haron	10.	6	Willis	10.	6
Hebden	10.	6	トランペット & ティンパニー		
コントラバス			Trowa	10.	6
Dietrich	15.	-	Miller	10.	6
Sworms	10.	-	Fr.Smith	10.	6
オーボエ					
Eyfert	10.	6			
Teede	10.	6			
Vincent	10.	-			
Wieksel	8.	-			

オーケスト総計 £17. 15. -

## 歌手

ヘンデルの付き人 &amp; 裏方

Sra. Frasi	£6.	6.	-	John Duburg	£1.	1.	-
Miss Frederick	4.	4.	-	Evens	10.	6	
Miss Young	3.	3.	-	Condell	10.	6	
Mr Beard	-	-	-	Green	10.	6	
Mr Champness	1.	11.	6	Mason	10.	6	
Mr Wass	1.	1.	-				
6 Boy' s	4.	14.	6	楽器運搬	£1.	11.	6
Bailden	1.	1.	-				
Barrow	1.	1.	-	Mr Smith	£5.	5.	6
Champness		10.	6				
Baiden Jr.		10.	6	警護費用	£3.	3.	-
Ladd		10.	6				
Cox		10.	6				
Munck		10.	6				
Reinhold		10.	6				
Warz		10.	6				
Courtney		10.	6				
Kurz		10.	6				

オーケストラ+歌手+警護+その他 : 総計 £ 58. 14. -

## ★1759年5月3日捨子養育院＜メサイア＞会計報告（5月10日集計）

歌手				裏方 & 付き人			
Sra. Frasi	£6.	6.	-	Evens	10.	6	
Sra. Ricciarelli	5.	5.	-	Condell	10.	6	
Mrs. Scott	3.	3.	-	Mason	10.	6	
Mr Beard	-	-	-	Green	10.	6	
Mr Champness	1.	11.	6	Mr. Thomas	10.	6	
6 Boy's	4.	14.	6	John Duburgh	£1.	1.	-
Baiden	1.	1.	-	楽器運搬	1.	11.	6
Barrow	1.	1.	-				
Champness		10.	6	オーケストラ	17.	15.	-
Baiden Jr.		10.	6	歌手	28.	17.	6
Ladd		10.	6	ヘンデルの付き人(欠)	-10.	6	
Cox		10.	6	Mr. Smith	5.	5.	-
Munck		10.	6	オルガニスト			
Wass	1.	1.	-	J.C.Smith	-	-	-
Walz		10.	6	Howard	-	-	-
Kurz		10.	6				
Courtney		10.	6				
Reinhold		10.	6				
歌手	計 £28.	17.	6				

オーケストラ+歌手+警護+その他： 総計 £ 56. 12. -
----------------------------------

上記3枚の捨子養育院＜メサイア＞演奏に要した経費報告書は実に興味深い。オーケストラ編成がかなり自由であること、ソリストは得られる時には各パート複数いたこと、ソリストとコーラスを含めて歌い手はおよそ23～4人と小規模であり、ソリストも共にコーラスを歌ったらしいこと、最もギャラの高いのがフラージ夫人で常に6ポンド6シリング支払われていたこと、会場警護に2～3ポンドが使われ会場警備に気を遣っていること（＜メサイア＞人気の裏付け）等々が浮かび上がってくる。

当時最大人気歌手でもあった Beard ビアード氏。オルガニストは、慈善ゆえのボランティアに徹しており、いずれの公演においても（---）と記され支払われていない。

フラージ夫人その他のソリストの6ポンド、5ポンド、4ポンド何がしという額が当時どれほどのものであったか。オーケストラ団員の多くが10シリング6ペンスであったとして、ソリストの評



価はかなりのものであったと推測できよう。しかし、どう足し算しても、合計金額が合わない、解らない！電卓と格闘すること数日、1ポンド=10シリング=100ペンスという常識の中で解決のつかないまま眺めていると、6ペンスという中途半端な数字が妙に多く気になってきた。もしかしたら10進法ではないのでは？イギリスの貨幣、イギリス経済史、イギリスの物価指数等々経済関連の書をあさるうちに、遂に判明。1970年までのイギリスは1ポンド=20シリング=240ペンスだったのである。即ち1シリングは12ペンス、従って6ペンスが0.5シリングということになる。何と面倒な！しかしこれで解決、全ての合計が収まった。

更に、前号研究Ⅰにも紹介した通り、“<メサイア>のチケットが半ギニー”という広告が当時の新聞にしばしば見られる。これ又面倒な事に、ポンドの他にギニー貨幣が存在し、1ギニー=21シリングだったそうである。半ギニー即ち10.5シリングということになる。この煩雑な計算を改善するために、1970年に現在の10進法通貨に改良されたのだった。

それにしても、10シリング貰った奏者は0.5ポンドの収入、即ちフラーズ夫人のギャラは彼等の10倍以上ということになる。慈善のための演奏会ということで、ギャラもかなり抑えられていたというが、試みに当時の一般庶民の経済状態はどんなものであったろうか。イギリス経済史において、しばしば基準として引き合いにだされる職業によって比較してみよう。

水夫（最下級労働者）の年収が20ポンド、熟練労働者50ポンド、植字工100ポンド、下層ジェントルマンで250ポンド、という時代である。しかもこれらは年収であるから、<メサイア>を歌ったソリスト達の1回分のギャラはかなりのものであった。

## § . 結び

本研究Ⅱにおいて、<メサイア>の作曲年から、初演そして18年間の再演の楽曲変遷（変化）を、それらを歌ったソリストの変遷に並行して求めてきた。ヘンデルはその都度、得られる歌手によって音域を上げたり下げたり（声域すら替えながら）、アリアを長くしたりカットしたり、編曲したり等々様々な試みをしたことが明白になった。また、“But who may abide the day of His coming”, “Rejoice greatly, O daughter of Zion”, “He shall feed his flock like a shepherd”, “Thou art gone up on high”, “How beautiful are the feet of them”, “The trumpet shall sound” 等々、<メサイア>の中でも特に美しく人々を魅了する、いわば中核となるソロ楽曲が常に変更の対象であった事が明らかになった。

しかし<メサイア>の決定版等はあるべくもなく、作曲者自身によって少しずつ変化されていった作品であるということ認識せねばならない。作曲時の<メサイア>、ダブリン初演<メサイア>、ロンドン初演<メサイア>、ロンドン再演<メサイア>、その後〇〇年版<メサイア>、そして捨子養育院<メサイア>〇〇年版といった版を想定しての<メサイア>演奏が求められよう。

### 参考文献

- Burney, Charles : A General History of Music (1776)  
Burrows, Donald : Handel (1994)  
Dean, Winton & Knap, John Merrill : Handel's Operas ((1987)  
Deutsch, Otto Erich : Handel A Documentary Biography (1955)  
Hogwood, Christopher : Handel (1984)  
Lang, Paul Henry : Gerge Frideric Handel (1972)  
Larsen, Jens Pete : Handel's MESSIA(1972)  
Sadie, Stanley : Handel(1968) 邦訳：ヘンデル(村原京子訳)(1975 全音楽譜出版社)  
Shaw, Watkins : The Story of HANDEL's MESSIA (1963)  
Smith, Ruth : Handel's Oratorios and Eighteenth-century Thought (1995)  
Smith, William G : Concerning Handel (1948)  
Streatfeild, R A : Handel(1964)

### 楽譜

- Shaw, Watkins : Handel's Conducting Score of Messiah  
Randall& Abell : MESSIAH An Oratorio in Score  
Neue Handel Ausgabe Georg-Friedrich-Handel-Gesellschaft(1995)  
Chrysander Friedrich : Handel's Messiah

### 事典

- The New Grove Dictionary of Music and Musicians (1980)(2001)